

妖僧記

泉鏡花作

一

加賀の國黒壁は、金澤市の郊外一里程の處にあり、
魔境を以て國中に鳴る。蓋し野田山の奥、深林幽暗
の地たるに因れり。

茲に摩利支天を安置し、之に冊く山伏の住へる寺
院を中心とせる、一落の山廓あり。戸數は三十有餘
にて、住民殆ど四五十年なるが、いづれも俗塵を厭ひ
て遁世したるが集りて、悠悠閑日月を送るなり。

然れば夜となく、晝となく、笛、太鼓、鼓などの、
舞囃子の音に和して、謠の聲起り、深更時ならぬに
琴、琵琶など響、微に、金澤の寢耳に達する事あり。
一歳初夏の頃より、此のあたりを徘徊せる、世に
も忌はしき乞食僧あり、其の何處より來りしやを知
らず、忽然黒壁に住める人の眼界に顯れしが、殆ど
濕地に蛆を生ずる如く、自然に湧き出でたるやの觀
ありき。乞食僧は其の年紀三十四五なるべし。寸々
に裂けたる鼠の法衣を結び合せ、繋ぎ懸けて、辛う

じて之を絡へり。

容貌 甚だ憔悴し、全身黒み瘦せて、爪長く髯短し、唯之のみならむには、一般乞食と變はらざれども、一度其鼻を見る時は、誰人といへども、造化の奇を弄するも、亦甚だしきに、驚かざるを得ざるなり、鼻は大にして高く、而も幅廣に膨れたり。其の尖は少しく曲み、赤く色着きて艶あり。鼻の筋通りたれば、額より口の邊まで、顔は一面の鼻にして、瘦せたる頬は無きが如く、若し掌を似て鼻を蔽へば、乞食僧の顔は隠れ去るなり。人ありて遠くより渠を望む時は、鼻が杖を突きて歩むが如し。

乞食僧は一條の杖を手にして、須臾も之を放つことなし。

杖は 状の自然木なるが、其の曲りたる處に鼻を凭たせつ、手は後様に骨盤の邊に組み合せて、所作なき時は立ちながら憩ひぬ。要するに吾人が腰掛けて憩ふが如く、乞食僧にありては、杖が鼻の椅子なりけり。

奇絶なる鼻の持主は、乞丐の徒には相違なきも、強ち人の憐愍を乞はず、曾て米錢の恵與を強ひしことなし。喜捨する者あれば鷹揚に請取ること、恰も

上人しやうにんが檀越だんえつの布施ふせを納むをさるが如ごとき勿體もつたい振りぶりなり。

人ひと若もし其その倨傲きよがうなるを憎にくみて、些さの米錢べいせんを與あたへざらむか、乞食僧こじきそうは敢あへて意いとなさず、決けつして又また餓うむともせず。

此この黒壁くろかへには、夏候かこう一疋びきの蚊かもなしと誇ほこるまでに、蝦蟇がまの多おほき處ところなるが、乞食僧こじきそうは巧たくみに之これを漁あきりて引裂ひきさき啖くらふに、約おほむね一夕いつせき十數疋すうひきを以もつて足たれりとせり。

然されば乞食僧こじきそうは、晝間ちうかん何處いづくにか潛伏せんぶくして、絶たえて人ひとに見まみえず、黄昏くわうこん蝦蟇がまの這出はひいづる頃ころを期きして、飄然へうぜんと出現しゆげんし、此處こゝの軒下のきした、彼處かしこの堀際へいぎは、垣根かきねあたりの薄暗うすぐら闇やみに隱見いんけんしつゝ、腹はらに充みたして後のちは又また何方いづかたへか消きえ去さるなり。

爰こゝに醜怪しゆゝくわいなる蝦蟆がま法師ほふしと正せい反對はんたいして、玲瓏れいろ玉たまを欺あざむ
 く妙齡みようれいの美人びじんありて、黒壁くろかべに住居すまひせり。渠かれは清川きよかわお
 通つうとて、親おやも兄弟きやうだいもあらぬ獨身ひとりみなるが、家いへを同おなじく
 する者ものとしては、僅わずかに二人にんの老嫗おつなあるのみ、是これ其その婢ひ
 なり。

お通つうは清川きよかわ何某なにがしとて、五百石ごひゃくを領りやうせし舊藩士きうはんしの娘むすめ
 なるが、幼ようにして父ちちを失うしなひ、去々をとと年としまた母ははを失うしなひ、
 全まつたく孤獨こどくの身みとはなり果はてつ、知しれる人ひとの嫁入よめいれ、
 婿むこ娶とれと要いらざる世話せわを懊惱うるさく思おもひて、母ははの一周忌いっしゆうき
 の終おわるとともに金澤かなざわの家いえを引拂ひきはらひ、去年こぞよりこゝに
 移うつりたるなり。固もとより巨額きよがくの公債こうさいを有いうし、衣食いしょくに事こと
 缺かかざれば、花車くわしやふうりゆう 風流ふうりゆうの日ひを送おくりて、何なんの不足ふそくも
 あらざる身みなるに、月つきの如ごとく其顔そのんほは一片ぺんの雲くもに蔽おほは
 れて晴はるるゝことなし、これ母親ははの死しを悲かなみ別離わかれに泣な
 きし涙なみだの今いまは雙頬そうけうに懸かれるを光陰くわういんの手ても拭ぬぐい去さる
 能あたはざるなりけり。

讀書どくしよ、彈琴だんきん、月雪花つきゆきはな、其等それらのものは一つとして憂いう
 愁しうを癒いやすに足たらず、轉うたた懷舊くわいきうの媒なかたちとなりぬ。但たゞ
 野田山のだやまの墳墓ふんぼを掃はらひて、母上ははと呼よびながら土つちに縊すがり

て泣き伏すをば、此上無き娯樂として、お通は日課の如く參詣せり。

七月の十五日は殊に魂祭の當日なれば、夕涼より家を出で、獨り彼處に赴きけり。

野田山に墓は多けれど詣來る者最少なく墓守る法師もあらざれば、雑草生茂りて卒堵婆倒れ斷塊壞

墳算を亂して、満目轉た荒涼たり。

何時變らぬことながら、お通は追懐の涙を灌ぎ、花を手向けて香を燻じ、在ますが如く齊眉きて一時餘物語りて、歸宅の道は暗うなりぬ。

急足に黒壁さして立戻る、十間ばかり間を置きて、背後よりぬき足さし足、密に歩を運ぶはかの乞食僧なり。渠がお通のあとを追ふは殆ど旬日前よりにして、美人が外出をなすに、逢うては、影の形に添ふ如く絶えず其處此處附絡ふを、お通は知らねど見たる者あり、此夕もまた美人を其家まで送り届けし後、杉の根の外に佇みて、例の如く鼻に杖をつきて休らひたり。

時に一縷の暗香ありて、垣の内よわ洩れけるにぞ法師は鼻を蠢めかして、密に裡を差覗けば、美人は行水を使ひしやらむ、浴衣涼しく引絡ひ、人目のあ

らぬ處ところなれば、巻帯まきおび姿すがたはで端居はしゐしたる、胸むねの
あたりの眞白ましろきに腰こしの紅くれなゐ添てりひて、眩まぼきはかり
美うるはしきを、蝦蟆法師がまほふしは左瞻右視とみかうみ、或あるひは手てを掉ふり、
足あしを爪立つまだて操あやつりにんぎやう
人形にんぎやうの動うごくが如ごとき奇異きいなる身振みぶり
をしたりとせよ、何思なにおもひけむ踵くびすを返かへし、更さらに迂回うくわい
て柴折戸しをりどのある方かたに行ゆき、言葉ことばより先さきに笑懸わらひかけて、
「暖あたゝか 飯めし一膳ぜん與あたへたまへ、」と巨おほいなる鼻はなを庭前にわさき
へ差出さしたしぬ。

未いまだ乞食僧こじきそうを知らざる者ものの、斯かる時とき不意いに此鼻このはなに
出會であひなば少すくなくとも絶ぜつ叫けやうすべし、美人びじんは己すてに渠かれ
を知しれり。且かつ其狂そのきやうか、癡ちか、いづれ常識じやうしき無なき阿房あはう
なるを聞ききたれば、驚おどろける氣色いしきも無なくて、行水ぎやうすゐに亂みだれび
鬢んの毛けを鏡かゞみに對たいして撫附なでつけりたりけり。

蝦蟆法師がまほふしはためつ、すがめつさも審いびかしげに鼻はなを
傾かたむけお通つうが為なせる業わざを視ながめたるが、をかしげなる聲こゑ
を發はつし、「其それは」と美人びじんの手しにしたる鏡かゞみを指さして尋たづ
ねたり。妙めうなることを聞きく者ものよとお通つうは纔わづかに見返みかへり
て、鏡かゞみとばかり答こたへたり。阿房あはうはなほ、も推返おしかえして、
何なんの用ようにするぞと、問とひぬ。「姿すがたを映うつして見みるもの
なり、御僧おんそうも鼻はなを映うつして見み給たまへかし。」といひさま
鏡かゞみを差向うつむけつ、蝦蟆法師がまほふしは飛退とびさがりて、さも恐おそれたる

風情にて鼻を飛ばして遁去りける。

これを語り次ぎ傳へ聞きて黒壁の人々は明かに蝦蟆法師の價値を解したり。なは且つ、渠等は乞食僧のお通に對して馬鹿々々しき思ひを運ぶを知りたれば、いよ／＼其阿房なることを確めぬ。

さりながら鏡を示されし時乞食僧は逃げ去りつゝ人知れず左記の數言を呟きたり。

「予は自ら誓へり、世を終るまで鏡を見じと、然り斷じて鏡を見まじ、否これを見ざるのみならず、今思出したる鏡といふ品の名さへ、務めて忘れねばならぬなり。」

蝦蟆法師がお通に意あるが如き素振を認めたる連中は、これをお通が召使の老媪に語りて、且つ戯れ、且つ戒めぬ。

毎夕納涼臺に集る輩は、喋々しく蝦蟆法師の噂をなして、何者にまれ乞食僧の晝間の住家を探り出して、其來歴を發出さむ者には、賭物として金一圓を抛たむと言ひあへりき、一夕お通は例の如く野田山に墓參して、家に歸れば日は暮れつ。火を點じて後、窓を展きて屋外の蓮池を背にし、涼を取りつゝ机に向ひて、亡き母の供養のために法華經ぞ寫したる。其傍に老媪ありて、頻に針を運ばせつ。時に彼の蝦蟆法師は、何處を徘徊したりけむ、不圖今此處に来れるが、早くもお通の姿を見て、眼を細め舌なめずりし、恍惚たるもの久しかりし、乞食僧は美人臭しとでも思へるやらむ、むく／＼鼻を蠢かし漸次に顔を近附けたる、面が格子を覗くとともに、鼻は遠慮無く内に入りて、お通の頬を掠めむとせり。珍客に驚きて、お通はあれと身を退きしが、事の餘りに滑稽なるにぞ、老婆も叱言いふ違なく、同時

に吻々と吹き出しける。

蝦蟆法師は誤りて、歡心を購へりと言思ひけむ、
悦氣満面に満ち溢れて、うな、うな、と笑ひつゝ、
頻りにものを言ひ懸けたり。

お通は豫て忌嫌へる鼻がものいふことなれば、冷
然として見も返らず、老媪は更に取合ねど、鼻はな
ほもづう／＼しく、役にも立たぬことばかり句切も
なさで饒舌散らす。其の懊惱さに堪へざれば、手
以て去れと命ずれど、いつかな鼻を引込ませぬより、
老媪はじれてやつきとなり、手にしたる針の尖を鼻
の天窓に突立てぬ。

あはれ乞食僧は留を刺されて、
「痛し。」と身體を反返り、涎をなすりて逸物を撫
廻し／＼、はふはふの體にて遁出しつ、走り去るこ
と一町ばかり、俄然留り振返り、蓮池を一つ隔てた
る、燈火の影を屹と見し、眼の色はたゞならで、怨
毒を以て満たされたり。其時乞食僧は杖を掉上げ、
手段の奈何をさへ問はざれば何の望か達せざらむ。
恚は斷乎として言放ち、大地を轟と打敲きつ、首
を縮め、杖をつき、徐ろに歩を回らしける。

其背後より拔足差足、密に後をつけて行く一人の

老媪あり、これ彼のお通の召使が、未だ何人も知り得ざる蝦蟆法師の居所を探りて、納涼臺が賭物したる、若干の金子を得むと、お通の制むるをも肯かずして、そこに追及したりしなり。呼吸を殺して從ひ行くに、阿房は然りとも知らざる状にて、殆ど足を曳摺る如く杖に縋りて歩行み行けり。

人里を出離れつ。北の方角に進むこと凡二町ばかりにて、山盡きて、谷となる。こゝ嶮峻なる絶壁にて、勾配の急なること恰も一帯の壁に似たり、松杉を以て點綴せる山間の谷なれば、緑樹長に陰をなして、草木が漆黒の色を呈するより、黒壁とは名附くるにて、此半腹の洞穴にこそ彼の摩利支天は祀られたれ。

遙かに瞰下す幽谷は、白日闇の別境にて、夜晝なしに靄を籠め、脚下に雨のそぼ降る如く、溪流暗に魔言を説きて、啾々たる鬼氣人を襲ふ、其物凄さ謂はむ方なし、

まさか此處とは想はざりし、老媪は恐怖の念に堪へず、魑魅魍魎隊をなして、前途に塞るとも覺しきに、慾にも一步を移し得で、あはれ立竦になりける時、二點の螢光此方を見向き、一喝して、

「何者ぞ。」掉冠れる蝦蟆法師の杖の下に老媪は呵
呀と蹲踞りぬ。

蝦蟆法師は流眄に懸け、

「へ、へ、へ、うむ正に此奴なり、予が顔を傷附け
たる、大膽者、讐返といふことのあるを知らずして」
傲然としてせゝら笑ふ。

これを聞くより老媪はぞつと心臓まで寒くなりて、
全體氷柱に化したる如く、いと哀れなる聲を發して、
「命ばかりはお助けあれ。」とがた／＼震へて居た
りける。

さるほどに蝦蟆法師は飽まで老媪の瞻を奪ひて、
 「コヤ老媪汝の主婦を媒妁して我執念を晴らさせよ。
 もし犠牲を捧げざれば、お通は固より汝もあまり好
 きことはなかるべきなり、忘れてもとりもつべし。
 其まで命を預け置かむ、命 冥加な老耆めが。」
 と荒らかに言葉棄て、疾風土を捲いて起ると覺しく、
 恐る／＼首を擡げあぐれば、蝦蟆法師は身を以て隕
 すが如く下り行き、靄に隠れて失せたりけり。
 やれ／＼生命を拾ひたりと、眞蒼になりて遁歸れ
 ば、冷たくなれる納 臺に未だ二三人居残りたるが、
 老媪の姿を見るよりも、

「探検し來りしよな、蝦蟆法師の住居は何處。」と
 右左より争ひ問はれて、答ふる聲も震へながら、
 「何がなしに一件ぢや、此なり此なり。」
 と、握拳を鼻の上にぞ重たる、乞食僧の人物や、こ
 れを癡と言むよりはた又狂と言むより、尤も魔たる
 に適するなり。もし然らずば少なくとも魔法使に適
 するなり。

斯りし後法師の鼻は甚だ威勢あるものとなりて、
暗裡人をして恐れしめ、自然黒壁を支配せり。こは
一般に老若が太く魔僧を忌憚かり、敬して遣さから
むと勤めしよりなり、誰か妖星の天に歸して、眼界
を去らむことを望まざるべき。

こゝに最も其然らむことを望む者は、蝦蟆と、清
川お通となり。如何となればあまたの人の嫌惡に堪
へざる乞食僧の、黒壁に出没するは、蝦蟆とお通の
あるためなりと納涼臺にて語り合へるを美人は、ふ
と聞嚙りしことあればなり、思うてこゝに到る毎に、
お通は執心の恐しさに、

「母上、母上」

と亡母を念じて、己が身邊に絡纏りつゝある淫魔を
却けられむことを哀願しき。お通の心は世に亡き
母の今も其身とともに在して、幼少のみぎりに於け
るが如く其心願を母に請へば、必ず肯かるべしと信
ずるなり。

さりながらいかにせむ、お通は遂に乞食僧の犠牲
にならざるべへからざる由老嫗の口より宣告されぬ。

前日、黒壁に賁臨せる蝦蟆法師への貢として、こ
の美人を捧げざれば、到底好き事はあらざるべしと、

恫喝的に乞食僧より、最も渠を信仰して其魔法使たるを疑はざる件の老媪に媒妁すべく言込みしを、老媪もお通に言出しかねて一日免れに猶豫しが、厳しく乞食僧に催促されて、謂はで果すべきことならば、止むことを得て取次たるなり。然るにお通は豫め其趣を心得たれば、老媪が推測りしほどには驚かざりき。

美人は冷然として老媪を諭しぬ、

「母上の世に在さば何とこれを裁き給はむ、先づ其を思ひ見よ、必ず斯る乞食の妻となれとはいひ給はじと」謂はれて返さむ言も無けれど、老媪は甚だしき迷信者なれば乞食僧の恐喝を真とするにぞ、

「生命に關はる大事と思ひて、彼奴は神通 廣大なる魔法使にて侯へば、何を仕出ださむも料り難し。

さりとて鼻に従ひ給へと私 申 上げはなさねども、よき御分別もおはさぬか。」と熱心に云へば冷かに、「いや、分別も何もなし、たとひいかなることありとも、母上の御心に合はぬ事は誓つてせまじ。」

と手強き謝絶に取附く島なく、老媪は太く困じ果てしが、何思ひけむ小膝を拍ち、

「すべて一心固りたるほど、強く恐しき者はなきが、

鼻が難題を免れむには、此方よりも其相當の難題を
吹込みて、これだけのことをしさへすれば、其だけ
の望に應ずべしと斯ういふ風に談ずるが第一手段に
候なり、昔語に然ること侍りき、こゝに一條の蛇あ
りて、とある武士の妻に懸想なし、頑にしやうじ着
きて離るべくもなかりしを、其夫何某智慧ある人
にて、欺きて蛇に約し、汝巨鷲の頭三個を得て、其
を我に渡しなば、妻をやらむとこたへしに、蛇は是
を諾ひて鷲と戦ひ亡失せしといふことの候なり。さ
れど今愁に鷲の首などゝ謂ふ時は彼の恐しき魔法使
ひの整へ來ぬとも料り難く困りて婆々が思案には、
其方の言分承知したれど、親の許のなくてはならず、
母上だに引承たまはゞ何時にても妻とならむ、去つ
て先づ母上に請來れと、斯様に貴娘が仰せられし、
と私より申さむか、何が扨母君は疾に世に亡き御方
なれば、出來ぬ相談と申すもの、とても出來ない相
談の出來やう筈のなきことゆゑ、いかなる鼻もこれ
には弱りて、しまひに泣寝入となるは必定、ナニ御
心配なされまするな、と説く處の道理なるに、お
通もつかと頷きぬ。斯くて老嫗がこのよしを蝦蟆法
師に傳へて後、鼻は黒壁に見えずなれり。

さては旨いぞシテ操つたり、とお通には固より納涼臺にも老媪は智慧を誇りけるが、奚んぞ知らむ黒壁に消えし蝦蟆法師の、野田山の墓地に顯れて、お通が母の墳墓の前に結跏趺坐してあらむとは。

其夕もまた其處に詣でし、お通は一目見て蒼くなりぬ。

【完】